

文化映画紹介

渡部美

悩まずアタック！ 脱・いじめのスパイラル 最期の願い、〜どうする自宅での看取り〜

映学社作品

悩まずアタック！
脱・いじめのスパイラル

「スタッフ」製作統括・監督

高木裕己 脚本／浅尾政行

高木裕己 撮影／高橋哲也

照明／佐藤武 音楽／加藤由

美子 録音／長隆紀 整音／

東館康夫 メイク／ユーケア

コーディネーター／斎藤晃顕

キャストイング／新江佳子

演出応援／能登秀美 助監督

／桑島岳大、藤崎仁志 録音

助手／柴崎明成 照明助手／

小宮山光之 挿入歌／平井堅

「二人じゃない」出演／柴田

杏花、酒井奈夢、武井紗聖、

黒木璃七、高野萌夏、片山美

穂、高安智美、帆足健志、永

滝元太郎、谷本和優 撮影協

力／横浜市立浜中学校、横浜

市立六角橋中学校 企画協力
／法務省人権擁護局 制作・
著作／映学社 完成・14年D
VD作品・33分

「内容」学校でのいじめによ
る自殺者は後を絶たない。こ
の映画は法務省が主催する第
31回全国中学生人権作文コン
テストで受賞を果たした、あ
る女子中学生の作文をもとに
ドラマ化した作品である。

主人公は幸子という中学一
年生。幸子は何処にでもいる
ような女の子で、いじめなど
は自分に関係ないと思ってい
た。だがある日、バレー部の
同学年の仲間からいじめを受
けてしまう。更衣室で靴がな
くなり、靴はゴミ箱に捨てら
れていた。練習中も仲間から
無視され、あぐくは部屋に閉

じ込められてしまい、授業に
も遅刻してしまふ。当初、幸
子はいじめを受ける自分に独
り耐えて悩んでいたが、つい
に母親に自分の境遇を打ち明
ける。さらに幸子は授業のア
ンケートに「自分はいじめら
れている」との一文を書くの
だった。驚いた親と教師たち
は幸子から詳しい話を聞き出
し、彼女をいじめていた仲間
たちにも個別で聞き取り調査
を行い始めた。

この内容は実際にいじめを
受けていた女子の経験を綴っ
た作文がもとになっているの
で、何故、急に自分がいじめ
に遭うのか、その原因にも言
及している。するとここに意
外なエピソードがからんでく
る。女子たちの聞き取り調査

が進むうちに、幸子はいじめ
ていたグループの一人の女子
が「自分は小学生の時、幸子
にいじめを受けていた」と告
白するのである。驚いた教師
はさっそく幸子にその事実を
聞くが、幸子も意外な顔をし
て、あれはただ、からかって
いるだけでいじめとは思って
いなかったと弁明。しかし、
小学生時代、そのような幸子
に自分はとても傷ついたとそ
の子は訴えるのだった。映画
はラスト近くに幸子とその子
を和解させ、やがてクラスの
いじめも少なくなっていくた
と結ぶ。

いじめを体験した本人なら
ではの体験談から、よく見る
と被害者にもいじめを誘発さ
せる要因がある例をこの映画

は描いている。そして実際に
いじめに遭った当事者が、一
人で悩まずに勇気を出して身
近な人に言うということが何
よりも大切であることを伝え
ている。中学生の作文をバラ
ンスのよい短篇ドラマに仕上
げ具体的な事例から説得力を
持たせた演出力も高く評価し
たい作品である。第61回教育
映像祭最優秀賞（文部科学大
臣賞）受賞。

最期の願い
〜どうする自宅での看取り〜

「スタッフ」製作統括・監督
／高木裕己 撮影／高橋哲也
ライン編集／正者章子 ナレ
ーター／保谷果菜子 ヴァイ
オリン演奏／河村典子 取材
協力／船戸クリニク 完成

／13年 DVD作品・26分

「内容」今の時代は団塊の世
代の高齢化が始まり急速に
「多死社会」を迎えている（現
在の日本では年に120万人
が亡くなっており、2030
年には160万人を超えるとい
う）。そして国はそれに呼
応するかのように、在宅での
看取りを進める政策を打ち出
しているという。この背景に
は「多死社会」の現状に鑑み、
これ以上、病院などで看取り
の場を確保することが難しく

なってきたことが挙げら
れる。病院から退院を求めら
れ自宅で最期を迎える高齢者
が増えているのである。しか
し、患者にとっては、ただそ
のまま病院から自宅へ直行と
いう患者本人の意思を無視し
た政策がまかり通ってよいは
ずはない。当然、そこには未
期癌などを患っている高齢者
にとつて、最後まで安心して
住める居場所が大切なものと
なってくる。最後の段階まで
患者の自己決定に基づくQO

L（クオリティ・オブ・ライ
フ）生活の質、生命の質）が
確保される環境はあるのだろ
うか。

この映画の舞台は岐阜県養
老郡養老町である。人口はお
よそ3万人。この数年で高齢
化が進み、現在、65歳以上の
高齢者は4人に1人。映画は
この町で20年前より患者たち
を支えてきた船戸クリニク
に取材、その院長である船
戸崇史医師の活動を通して在
宅ケアの在り方を記録してい
る。このクリニクは医師8
名、看護師10名、スタッフ21
名で運営され、養老町の半径
16キロ以内に住む120名余
りの人を診察している。

映画は日々、往診に邁進す
る船戸医師の言葉を紹介する。
船戸医師は「手術だけでは癌
には勝てないと悟った。そこ
で尊厳のある死に方、生き方
が大事であると考え在宅医療
クリニクを立ちあげた」と
語る。

「在宅（医療）は全部を見る。
病気だけじゃなくてその人の
価値観を含めた生き方も考え

の中に入れなきゃいけないし、
当然、家族関係に思いを馳せ
ることもすぐあります」
そこで映画はクリニクの
患者である小寺すみ子さん
（69歳）を紹介する。小寺さ
んは7年前に乳癌が見つかり
手術を受け、抗癌剤の投与も
受けたが、転移を抑えられな
かった。小寺さんはご主人の
介護のもと自宅で療養をされ
た。在宅ケアとは言っても病
気の痛みは日々増すし、容体
は一進一退。ご主人の疲労も
ピークに達している。そこで
船戸医師は桜の季節でもあり、
彼女をベッドに寝たままでよ
いからお花見に連れていこう
と発案する。その計画は身内
やクリニク側の周知な配慮
のもと、実行され、お花見に
出た小寺さんにも柔和な表情
が戻ってきた。小寺さんはそ
れからほどなくして亡くなっ
た。病院ですべての患者が最
期を迎える時代は過ぎ去った。
それに代わる在宅での看取り

であるが、その在り方も地域
によってさまざま姿を見せ
ることであろう。この映画は

在宅における最期の看取りと
いうものを、船戸クリニク
に密着して取材することによ
つて、かなり具体的にを見せて
いる。映画のラストには病院
から在宅に替わったことで、
それこそ患者が穏やかに
顔も変わってきたなどの多く
の遺族の証言を収めている。

かつて在宅医療の重要性を
長野県佐久総合病院に取材、
それを訴えた先駆的作品に
「病院はきらいだ」（1991
年）岩波映画製作所／時枝俊
江監督／本欄1056号掲
載）があった。今回の映画も
21世紀の在宅医療のあるべき
姿を捉えた注目作である。2
015年ワールドメディアア
フェスティバル・インターメデ
ィア・グローバル銀賞受賞（ド
イツ・ハンブルク）、映文連
アワード2014ソーシャ
ル・コミュニケーション部門
優秀賞受賞。（問合せ先112
作品とも映学社 TEL03
1335919729）



「悩まずアタック！」



「最期の願い」